

内平らかに外成る

日本病院薬剤師会理事
岩手県病院薬剤師会会長
岩手医科大学附属病院薬剤部長
工藤 賢三 Kenzo KUDO



「内平らかに外成る」は、当時の官房長官であった故小淵恵三氏が新元号を「平成」と発表した際、その意味を国民に伝えた言葉であります。私が初めて経験した時代の節目であり、その時の様子や雰囲気は今でも不思議と鮮明に覚えています。激動の昭和を振り返り、平和への願いを込めた平成も幕を閉じようとしています。そして迎える新しい元号の時代はどんな時代となっていくのでしょうか。

医療を取り巻く環境は、新しい時代を待たずとも激動のなかにあります。少子化高齢化による人口動態や患者像の変化、医療技術の高度化と複雑化、患者の期待やニーズの増大と多様化、介護、在宅、労働人口減少など、問題を挙げると切りがありません。一方では、ICT、IoTやAIなど予想を超えた進展に期待をもちつつ、現実の医療にどのように組み込んでいくのかその応用と調和が求められています。

医療の提供に必要な資源は、人・物・情報・経済（金）と言われており、医療に割くことができる資源が無尽蔵にあることが理想ですが、現実には限りがあります。発表されている直近の国民医療費は平成28年度で約42.1兆円となっています。10年前の国民医療費は33.1兆円であり、毎年約1兆円が増加していることとなります。財源別割合では、保険料は構成割合49.1%、患者負担は11.5%となっており、公費は38.6%で、そのうち国庫が25.4%、地方が13.2%となっており、これは国民の医療費を賄うために、保険料と患者負担金とだけでは足りず、公費、すなわち国と地方の税金を支出していることを示しています。ちなみに平成28年度では、国庫から10.7兆円が、地方から5.6兆円が財源として支出されています。最近の本邦の一般会計予算は約100兆円（うち税収部分は約60兆円）ですから、実にその11%が国民の医療のために支出されていることとなります。制度上、介護、年金等は別立てになりますので、医療のためだけにこの金額が投入されていることとなります。不足する歳入を公債（国債）で補っている本邦の財政にとっては、皆保険制度を守りつつ如何に医療費を適正に抑えるかが課題であり、限られた医療資源の配分、医療の効率化の議論は至極当然といえます。

医療のあり方に関連する報告書には、医療崩壊が社会問題化するなか、取りまとめられた「安心と希望の医療確保ビジョン（平成20年6月）」、今後の医療環境に対応すべく検討した「新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護等の働き方ビジョン検討会報告書（平成29年4月）」などがありますが、そのなかで薬剤師の専門性は極めて重要であるとされ、これまで以上にその能力を発揮し、薬物療法に深くかかわることが期待されています。これらを踏まえ、今後進むであろう医療のタスク・シフティング/タスク・シェアリングに、薬の専門職としてしっかり対応できる準備が大変重要と考えます。

「内平らかに外成る」、この時代は過ぎようとしています、この意味は時代を超えて不変であります。病院薬剤師も薬局薬剤師も共に連携し、変化する医療環境を俯瞰し、国民のために薬剤師に求められている役割を認識し、コンピテンシーを変化させ、時代の医療ニーズに応じていく必要があると考えます。

平成30年度から、日本病院薬剤師会の理事を拝命致しております。患者のため、会員と日病薬の発展のために微力ではありますが力を尽くして参りますので、何卒、宜しくお願い致します。